

組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名： 増田 和也	提出日：平成 22 年 11 月 26 日
東南アジア研究所における職名： *右記の該当する職位に○をつけて下さい。(講師・助教・助手・ <u>ポスドク</u> ・博士課程学生・修士課程学生・学部学生)	
派遣先の研究機関等(調査を実施した国名・機関名及びカウンターパート名)： インドネシア共和国・リアウ大学理学部・アフマッド＝ムハマッド (Afmad Muhammad) 氏 *派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所○をつけてください。 <u>大学</u> 研究機関・企業・その他)	
派遣期間： 平成 22 年 10 月 11 日 ~ 平成 22 年 11 月 12 日 (派遣日数： 33 日)	
研究活動等の主な内容(該当する番号に○をつけてください。複数可) <input checked="" type="checkbox"/> ①研究・実験 <input checked="" type="checkbox"/> ②フィールドワーク <input checked="" type="checkbox"/> ③セミナー <input type="checkbox"/> ④インターンシップ <input type="checkbox"/> ⑤サマースクール等の講習 <input type="checkbox"/> ⑥学会出席 <input type="checkbox"/> ⑦単位取得等 <input type="checkbox"/> ⑧その他	
研究活動の主な領域(該当する番号に1つ○をつけて下さい。) <input checked="" type="checkbox"/> ①人文学 <input type="checkbox"/> ②社会科学 <input type="checkbox"/> ③数物系科学 <input type="checkbox"/> ④化学 <input type="checkbox"/> ⑤工学 <input type="checkbox"/> ⑥生物学 <input type="checkbox"/> ⑦農学 <input type="checkbox"/> ⑧医歯薬学 <input type="checkbox"/> ⑨総合領域 <input type="checkbox"/> ⑩複合新領域	
派遣の概要(500~700字程度) <p>インドネシア、リアウ州の東岸部は広大な熱帯性泥炭湿地で構成され、1980年代後半以降、産業造林やアブラヤシ大農園建設といった大規模開発が急速に展開されてきた。その過程では地域住民と開発企業との間で土地権をめぐる相克が生じてきたが、ポスト・スハルト期の地方分権化・民主化の政治的流れや環境問題への関心が高まるなかで、開発側は地域住民との関係構築や環境対策を無視できない状況にある。一方、近年のアブラヤシの需要拡大を背景に、同地域にはアブラヤシ栽培地を求めて大量の移民が流入し、古くからの住民(旧住民)や開発企業との間では、土地利用をめぐり、より複雑な社会関係が生み出されている。今日、地球温暖化抑制にむけた議論が高まるなかで、泥炭地は大量の炭素を貯蔵する空間として、その保全の重要性が国際レベルで唱えられているが、保全と経済活動を両立しながら、政府・企業・地域住民による森林・泥炭地の協治のあり方を検討するには、社会的状況として地域における多様な行為主体の社会関係を把握することが必要である。本研究では、同地域の二つの村落(一つは旧住民中心、もう一つは移民中心)を対象として、1)村落の成立・拡大の過程、2)それを支える生産様式・親族関係・社会組織、3)村落と開発企業の間での交渉の過程、を明らかにすることを目的とする。そして、旧住民・移民・開発企業の間で創出されている社会関係を、相克や協調といった多面的な側面から検討することを目指す。</p>	
事業に係る研究成果(500~700字程度) <p>今回の派遣では、村落部での現地調査を実施するためにインドネシア研究技術省からの調査許可を取得したが、イミグレーション、警察、州・県・郡など諸官庁での手続きを終えるまでに2週間あまりの期間を要した。その合間に、リアウ大学で京都大学との共同で開催された、熱帯泥炭地保護についてのシンポジウムに参加し、リアウの村落社会における土地利用慣行とその変容について発表した。また、近年のリアウ州では小農セクターでのアブラヤシ栽培の拡大が著しく、この背景には政府の支援事業が大きく関係している。そのため、州開発計画局や州農園局において、アブラヤシ栽培に関する聞き取りおよび文書・統計資料の収集をおこない、関連事業の概要と進捗状況、直面している問題点について有益な情報を得ることができた。</p> <p>派遣中の半分の期間は現地調査にあてることができた。ただし、当初は2つの村落での現地調査を予定していたが、残された滞在期間を考え、今回は1つの村落のみを対象を絞り、そこでのデータ収集を深めることに努めた。現地調査では、対象集落の人口構成や集落の配置など基礎的情報を集めるとともに、古老から村落の形成史について聞き取りをおこなった。その結果、村びとはマレー半島やブンカリス島に親族をもち、これらの地域と頻りに往来してきたこと、森林開発と村びとによる泥炭地利用の拡大との対応、道路整備と人口移動の関係、などがわかった。今後も同地で現地調査を計画しており、今回得られたデータを整理していく。</p>	